

一心寺かわら版

第十八号 平成二十二年一月発行

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中はご助力を賜り誠に有難うございました。

本年も、「ふるさと」のように私を包んで下さ

る「あったかいもの」仏さまのはたらきを感じつつ、当り前でない毎日を感謝しつつ歩ませていただきますでしょう。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

合掌



「余命一ヶ月の花嫁」

昨年、映画「余命一ヶ月の花嫁」が公開されました。この映画は実話をもとにしており、平成十九年に二十四歳で亡くなった長倉千恵さんと彼女を囲む方々の物語です。彼女はガンという病に生きる姿を若い人に伝えたいと映像に残されました。この映画では千恵役は榮倉奈々さん、彼女の恋人・太郎役は瑛太さんでした。

二十三歳の千恵さんはある日、太郎さんに付き合っただけで告白されます。しかし、すぐに想いを受け入れることはできませんでした。彼女はひと月前から胸にしこりを感じ、最初の病院で乳ガンであると診断され、別の病院で再検査を受け、まだ結果が出ていない状況でした。後日、再度乳ガンと診断された彼女は太郎さんにそのことを打ち明けました。彼は、俺も協力するからと言ってくれました。そこから闘病と二人の付き合いが始まります。

髪は抜け、ウィッグをつけてのデート、でもこの頃はまだ、写

真に写ったその顔からは深刻さを伺い知ることはできませんでした。ガンを克服できると信じていました。しかし病状は良くなるはず、乳房の切除……「おっぱいのない彼女でいいの、なんで千恵を選ぶの」と聞く千恵さんに、太郎さんは「胸がなくても髪がなくても、千恵が千恵でいるならそれでいい」と伝えたのでした。

彼女はブログに「この数カ月、何度も何度も折れそうになったけど辛い事と同じ分だけあったかいものももらった。もしかしたらこれからもっと辛い事があるかもしれない。でもね、私にはそれをカバーしてくれるほどの幸せも感じる事ができるんだな。それってすごいこと、とつてもありがたいこと。一生をかけて感謝します。まわりの人を大切にします。私もみんなを幸せにできるようにがんばります。」と綴っています。

乳房切除の手術後、退院、就職し社会復帰、病気のことは忘れて新しい人生、将来のことを夢見ていました。しかし：再発、すでに転移してしまいました。



千恵さんは「たろちゃん、ちえ生きたいよ：助けて、怖いよ」と助けを求めるときもありました。ついに助からないかもしれないという思いが心をよぎったのでしようか。父・貞士さんや太郎さんには医師から余命が一ヶ月ほどであることが告げられました。それを本人には伝えず、父は彼女の背中をさすり続け、奇跡を願うばかりでした。

千恵さんはベッドの上で「普通の生活に戻り、ちゃんと女性として生きたい」、

「元気になったらお父さんと旅行に行きたい」と語ります。彼女が一日でも永く笑顔でいられるために心の底から望んでい

ることをしてあげたい。友人の桃子さんに「ウエディングドレスが着てみたい」と話していた千恵さん、みんなの協力でそれが三日後に実現することになりました。ウエディングドレス姿で写真を撮れると聞いた彼女は幸せそうでした。



当日、体調の悪かった彼女は笑顔で酸素チューブを外しました。満面の笑顔で写真に収まります。そして彼女には内緒にしていたサプライズの結婚式：そこにはガン患者ではなく二十四歳の一人の女性がいました。彼から指輪をはめてもらい涙があふれました。彼女はブログに「私はありえない感動を味わいました。みなさんに明日が来ることは奇跡です。それを知っているだけで、日常は幸せなことだらけで溢れています。」と綴りました。

その前はふさぎこむことが多かったのに、結婚式のあと気持ちが明るくなってきたという彼女。太郎さんへの想いを聞かれて、「日本語の中になんかです。ただの「愛」じゃないし、「かけがえのない人」でも軽すぎるし…、「感謝」という言葉もそんな言葉じゃ申し訳ない。…」とにっこり笑いました。

ある時、太郎さんがビデオを向けて「毎日何やってるの、病室で」と聞くと、ただひとこと「生きてる」…

千恵さんの母親は彼女が小学四年生の時に卵巣がんと診断され、中学三年生で亡くなっていく母を見送りました。この頃には、自分も…と感じていたのでしょうか。いのちの残り時間が短くなってきたある日、母親代わりのように世話になった叔母さんに「生きてるって奇跡だよ。いろんな人に支えられて生きてるんだよね。もう私、元気になったらすごい人間になれると思うよ」と語ったそうです。

彼女にウエディングドレスの次の願いは、と聞くと、「家に帰りたいかな…。家に帰って、ちょっとみんなを安心させてあげたい」と語りました。そして彼女は、余命一ヶ月の宣告から三十七日、みんなに見守られて人生を終えました。法名釋尼拯恵、残念ながら彼女が家に帰ったのは遺骨となつてからでした。一人になった貞士さんのもとに度々太郎さんが訪れます。彼は「千恵には感謝しきれないくらいたくさんのことを教えてもらいました。一生感謝します」と語りました。

残された人たちは彼女のことを想い続けます。彼女を支え続け心動かされた人たちが乳がん検診キャラバンを全国で開催しました。実際、その検診で乳がんが発見された方もいらつしやるそうです。



千恵さんは私たちに何を伝えて下さったのでしょうか。

「明日が来ることは奇跡、それを知っているだけで日常はしあわせだらけ」、明日が来ることは当り前ではない、かけがえのないいのちを喜び、健康に気を配って一日を大切に生きてほしい。

「いろんな人に支えられて生きてる」、だから、周りのみんなへの感謝の気持ちを忘れないでほしい。

（千恵さんと太郎さん）

「これで元気になったらすごい人間になれると思う」、このようにいのちの真実に少しでも目覚めて生きてゆけたら、とても素晴らしいこと。と教えて下さっているのではないのでしょうか。

今、彼女の姿は見えなくても、その想いは届いています。それは仏さまの願いとなつていてのではないのでしょうか。

(有国智光氏)



昨年五月に観音寺市民会館で有国智光氏を招いて講演会を催しました。三年の闘病の末、小児ガンで亡くなった息子・遊雲さんは「お母さん、ありがとう。みんなにもありがとうって言ってるね。ぼくは往きます。」という言葉を残されました。有国さんは我が子との交わりの中で、仏教者として一人の父親として揺れ動いた心を綴られています。

「我」に軸足を置いてしまう限り、死は我が消失することにはほかなりません。……しかし宇宙の全体は：確かで大きな一つの(へいのち)として、その全体の姿を現わしてくださいとさつてある。お名号、「南無阿弥陀仏」という「名のり」です。……「全体」は、この私がここに「特殊」の我を張ることを傷み悲しみ、特殊の「孤独」に陥ってしまうことのないように常に寄り添い慈しんでくださつてあった。それに気づかされたならば、死は「この私」という小さな、しかし絶対的なしこりが解きほぐされ、暖かく大きな(へいのち)の中へとくつろいでいくことにほかならないではありませんか。それが、決定的なところで「死」と区別される、「往生」という出来事です。」

「この私を慈しみ育む慈愛の総体として味わわれたとき、それを他力と呼びます。」

「遊雲さんは「死にかけて」いるのではない。いつも、その時そのときにいのち輝かせているだけなのだ。……もう、小さな、時間にしぼられた遊雲さんはいない。(おおきないのち)の遊雲さんになった。いや、遊雲さんというご縁の重なった(おおきないのち)



(有国遊雲さん)

が現われた。……父さんもこれから、新しい遊雲さんと、父さんのために現われてくれた永遠の遊雲さんと、会い続けていく。」

親鸞聖人は三哉(さんかな)といって、『教行信証』の中で三度、感嘆の気持ちを表白されています。

「如来の本願のなんと誠であることか。撰め取ってお捨てにならないという真実の仰せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。」

「慶ばしいことに、インド・西域の聖典、中国・日本の祖師方の解釈に、遇いがたいのに今遇うことができ、聞きがたいのにすでに聞くことができた。」

「悲しいことに、愚禿親鸞は、愛欲の広海に沈み、名利の深い山に迷って正定聚に入っていることを喜ばず、真実のさとりに近づくことを楽しいとも思わない。」

私を撰め取って捨てることのない阿弥陀仏の願いの「誠」に感動し、その教えに遇うことが出来たことを「慶」びつつも、自らの持つ煩惱を「悲」んでおられます。浄土往生の道を歩んだ親鸞聖人にしても「悲」はなくなりません。しかし、そこには「誠」に出遇つての「慶」の心があります。悲しい死の現実、私を苦しめる煩惱はなくなりますが、慶びのある人生を歩むことができます。「本願力にあえば人生空しく過ぎることはありません」(『高僧和讃』)とお示し下さっています。

千恵さんや遊雲さんのように本や映画にならなくても、私たち一人一人が同じようにいのちの物語を紡いでいます。誰一人として空しい人生を送らないように、絶望のままいのちを終えてゆかないようにと願っておられる、かぎりないいのちの仏さまが「南無阿弥陀仏」でした。

真宗のことば③ 「悪人正機」

めぐちゃん 「ねえ…お母さん。ねえってば」

母さん 「いま手が放せないから、ちよつと待ってなさい。お姉ちゃんでしょ！」

めぐちゃん 「ねえねえ、お母さん、私の話も聞いてよ〜」

母さん 「昨日からしんちゃんのお熱が下がらなくて大変なのよ。ねえしんちゃん、具合はどう？」

しんちゃん 「ウンウン お母さん苦しいよう〜」

父さん 「ただいま。しんちゃんの具合はどう？熱は下がったかい？」

めぐちゃん 「お父さんまで、しんちゃん、しんちゃんって。もう！ プンプン」

ばあちゃん 「おやおや、めぐちゃんどうしたの？」

めぐちゃん 「お母さんが私の話を聞いてくれないの。お父さんも帰ってくるなり、しんちゃんばかりかわいがるんだもん。私のことなんかどうでもいいんだ！」

ばあちゃん 「あらあら、そんなことないわよ。昨日からしんちゃんはお熱が出て大変でしょう」

めぐちゃん 「そうだ、いいこと考えた！私も病気になるって優しく看病してもらおうと」

父さん 「おいおい、めぐちゃんが病気になるってほしいなんて、だれも思っているわけないだろう。お父さんとお母さん、病気のしんちゃんのことを心配だけど、めぐちゃんのことかわいくてしょうがないんだよ」

ばあちゃん 「そうよ、二人のことを平等に思っているからこそ、いま苦しんでいるしんちゃんを心配せずにはいられないのよ」

めぐちゃん 「そうか！私のことを嫌いになったんじゃないんだ。いまはしんちゃんにかかりつきりだけど、私のことも同じように思ってくれていたんだね」

じいちゃん 「ほほ〜、めぐちゃんにもお父さんとお母さんの願いが届いたようだね」

「悪人正機」とは「悪人こそが阿弥陀如来の救いの本当のめあてである」という意味で、阿弥陀如来の慈悲のこころを表す言葉です。

阿弥陀如来は、平等の慈悲心から、すべての生きとし生けるものに同じさとりを開かせたいという願いを發されました。だからこそ、この慈悲のこころは、今現に迷いの中で苦しんでいるものに注がれるのです。

ですから、「悪人正機」という言葉を聞いて、悪事を犯してもかまわないと開き直ったり、悪いことをしたほうが救われると考えるのは、誤った受け止めかたです。

經典には、この如来の慈悲が、病に苦しんでいる子に特に注がれる親の愛情にたとえて説かれています。親鸞聖人は、このような阿弥陀如来の慈悲に遭遇し、その慈悲が注がれているのは、他でもない煩惱に満ちあふれた自分自身であると受けとめられました。

私たちは毎日いろいろな生き物のいのちを奪いながら生きています。また、めぐり合わせによってはどんな恐ろしいことでもしてしまいます。このような私の姿に気付かせ、同時にそのまま救い取ってくださるのが阿弥陀如来の慈悲であり、そのこころを表すのが「悪人正機」という言葉です。「本願寺パンフレット」より

『余命1ヶ月の花嫁』TBSテレビ報道局編（マガジンハウス文庫）

『遊雲さん父さん』有国智光著（本願寺出版社）